新刊書紹介

内山孝一氏著　生物哲學研究

著者は自分とは直接面識は無いが、序文に於ける著者の言葉より察すれば、年少氣鋭の士であり、生物學の研究に獻身せる、將來嘱目すべき學徒である。而して自ら一方に於て生物學内部の破鑽をなすと共に、他方更に生物學夫自身の依りて立つ根據の問題に考察を廻らし、哲學殊に認識論上より之を批判せるもの、並にそれに關聯せる論文集が此の書物である。科學の進歩分化多樣を極め、その結果各々その根本的な認識限界從てその任務の問題を顧みず、只管枝末の問題の考究に日も尚足らざる今日、しかも生物學研究者自身の内から、かゝる根本問題の吟味の起つた事は時宜に適した試であると思ふ。本書は六部から成立つてゐるが次にその内容を簡單に紹介して見る。

(I)生物哲學序論。生物學と云ふ一特殊科學を、科學概論中の一部として、批判哲學の精神に基き、その方法論から生物學の學的地位を考察し、以てその依つて立つ學的根據その、學の認識目的、認識限界を究明せる論文である。先づ生物學史上の二大潮流としての生命機械觀(Mechanismus)と生氣説(Vitalismus)の根本思想、及その代表者を略述し、之等兩者は何れも批判の立場を省みざる獨斷論として否定してゐる。(6本書のページを示す)然るに近代自然科學の研究の進むにつれて機械觀的な見方が盛となり、生命現象を物理學及化學的に説明せんと企つる爲め、遂には生物學獨自の立場如何が問題となり、その獨立性が危くせられたる故、その根據を根本的に考究する事が焦眉の急であるとして、こゝにこの問題の提出理由を述べてゐる。(9)

科學としての生物學の位置を考察する爲めに、ヴント、リッカート等の科學分類を擧げ、生物學を經濟學と共に中間範圍學とするリッカートの態度の不徹底をのべ、生物學は自然科學として普遍的法則を定立するものなる事を論じてゐる。然らばこゝに當然起り來る問題として、生物學と他の自然科學例へば物理學化學等との關係は如何と問題を進め、その第一歩として機械的因果律に就て檢討しておる。先づ機械的因果律の偶然性の問題、機械的因果律の構成の根據が自足完了性を有するか否かを問題とし、機械的因果律は夫自體自足完了性を有し自然科學の構成的原理なりとするカント及田邊博士の立場と、因果律夫自體、自足完了性無く、從つて機械的因果律を構成する原理ありて始めてそれは自然科學の構成原理たり得とする左右田博士の立場を擧げてゐる。

所で機械的因果系列をば、偶然なるものたらざらしめんとせば結局認識目的卽機械的因果律を補ふものを考へねばならぬと主張し、更に認識目的を認むるにしても生物學と他の自然科學とは同一なる認識目的を持つか否かと次の問題に進み、そこで著者は「有機體に關する認識は第一批判に於ける機械的因果律をその構成原理とするのみにては不充分なりとし、生物學の構成原理として機械的因果律、その規整的原理として内面的合目的性の概念を掲げ

ればならぬ」といふ第三批判に於けるカントの主張と、かゝる合目的性の概念こそ機械的因果の構成原理だとする左右田博士の主張とを比較してゐる。そこでカントの目的論に對する解釋如何が之を決する問題となるが、著者は之を次のa.b.の二方面から論究を進めカントの目的論と左右田博士の考とが決して相矛盾せるものでなく之を調和結合する事が可能なる事を主張してゐる。

a.形式的目的性と內面的目的性との關係。カントの目的論に於ける有機體卽生物に關する學と自然科學一般との關係は形式的內面的兩目的性を介して考察すれば明瞭となる。

b.合目的性と範疇との關係。之に關してはカント及田邊博士の如く生物に於ける合目的性を機械的因果の規整的原理とする立場と、左右田博士の如く構成的原理と考ふる立場とがあるが、後者の主張に於ては四つの場合ありとし(一)合目的性を範疇に接近せしめ之に範疇の妥當性を與ふるもの、(二)範疇を合目的性に接近せしめ、範疇全般を以てその妥當性全く合目的性と同じとして範疇論の新しき試をなすもの、(三)合目的性を範疇の何れかに屬せしめ、合目的性に構成的範疇の妥當性を與へんとするものゝ三つの場合を說明し、且その各々の成立不能の所以を述べ、最後に第四として左右田博士獨自の立場として機械的因果律の系列を思ふ場合に、その最初又は最後にその認識目的を示す如き何等かの補足を設け、この補足こそ合目的性の概念が機械的因果の構成的原理となり生物學の學的根據を示すものであるとして之を紹介し、之は機械的因果律と合目的性との論理的結合を意圖せるものとして之を認め、こゝに田邊博士の「カントの目的論」に於ける、形式的合目的性と內面的合目的性とは獨立せる意味を有すると解釋せる立場を導入し、カント、田邊博士、左右田博士の三人の立場を結合して考ふる事が可能であると斷じ著者自身の主張として述べてゐる。

「自然全般に於ける機械的因果律に、構成原理たるものは形式的合目的性であり、有機體のそれに原理たるものは、內面的合目的性であり、この二つの合目的性が、各々夫々の機械的因果律の偶然性に法則性を與ふる認識目的となり、形式的合目的性は自然科學一般の機械的因果律に構成的原理たらしむる根據を與へ、內面的合目的性は生物學の夫に構成的原理たらしむる根據を與ふるものである。」(46)

著者は以上の根據に基き、生物學が自然科學の一獨立科學であり、物理學、化學等の從屬的應用部門ならざる事を主張してゐる。

(II)日本生理學史綱要。最近故人となられた大澤謙二博士に獻ぜられた論文である。前大澤時代。大澤時代。後大澤時代の三部に分け、同博士を中心として日本に於ける生理學の發達を略述せるものであり、親切な勞作である。

(III)日本生理學史上に於ける蘭譯時代の一文獻。之は第二の論文の一部を構成すべきものであり、幕末に於ける醫學者島村鼎甫氏の業績を論じ、殊にその譯出にかゝる和蘭人リバツク著「生理學蒙」の紹介を試みてゐる。

(IV)「心理學の問題」に就て。東大心理學講師城戸幡太郎氏著の

同書に對する、著者自身の興味の點からの批評である。即ち同書が心理學の學的根據を取扱へるものであり、且目的論的說明の問題に觸れてゐる關係上、著者は生物學序論に於けるカントの目的論の解釋に基きて同書を批評してゐるのであるが、之はカントの目的論の解釋如何に歸する問題であり、考察の餘地があるものと思はれる。尙心理學に於て目的論的見地を强調せる人としては、Mc Dougall があり、その大著 An Outline of Psychology 1926. を參照せらるれば興味ある事であらう。

(V)無適先生。生理學者としての橋田邦彥氏の印象及その思想に對する感想である。

(VI)ハンス、ドリーシが生物學に關する特殊哲學に於ける位置に就て。新生氣說の Hans Driesch の思想の紹介に托してその所謂新生氣說を批評し、それと著者の立場の相違點を明瞭にせるものであり、最初の論文の補遺の役を演ぜるものである。初め詳細に新生氣說の主張を述べ、而してその主張する所は、生物學の科學批判たる生物哲學が認識論に止るのとは異り、在來の自然哲學乃至形而上學に移り行けるものと見、就中有機體に關する哲學と、一般宇宙に關する思想との間に區別を設けざる Driesch の說は純然たる形而上學なりと斷じて、著者自身の立場との相違を强調しゐる。

(VII)個性の問題。(VIII)カントの判斷力批判。此の兩部は何れも Hans Drieah の著書の邦譯であり、前者は The Problem of Individuality 1914 後者は Ile history and Theory of Vitalism 1914 (d) Kant—Critique of Judgement である。

尙卷末には浦本醫學博士の跋が附してある。

以上が本書の內容の大要であるが、最初の生物哲學序說が本書の眼目であり、著者が世に問はんとする所も此にあると思はれる生物學の根本問題といふが如き從來餘り顧みられざりし重大問題を取扱ひ、しかもその論構の堂々たる、推論の着實なるは敬服の外はない。

偖、自分は本書の內容の忠實なる紹介を旨とするものであり、且本書に對する批評は嘗て心理學研究第三卷第三輯（昭和三年六月）に今井貢氏によりてなされて居り、敢て蛇足を加へる必要はないが、未熟なる考を附加へるならば、著者は自らカント、田邊博士、左右田博士の夫々の立場を綜合する事が可能であるといはれてゐるが、その綜合の論理的過程の叙述が不充分であると思はれる。生物現象が合目的性の範疇に依りて構成せらるゝ事は避くべからざる事であるとしても、此の事は決して同一現象が因果法に依りて認識せらるゝ事を排するものではなく、生物學が苟も自然科學としての存在を主張するが爲には、結局因果法に依る說明が窮極であり、目的論的見解を導入すべきものではないのではなからうか。カントの如く規整的原理として目的性は取入れても、生物學が自然科學としての認識をなす上に於ては、しかく重大なる意味をもつものではなく、機械的因果のみが自然科學の法則的認識の對象となるべきものではあるまいか。勿論かゝる重大問題は一朝一夕に解決は困難である。將來ある著者の益々多幸にして

哲學研究　第百五十二號

學海の祕底に珠玉を探るべく精進あらん事を祈る。

飯田　願雄

（昭和三年心理學卒業、大學院學生）

寄贈圖書

（昭和三年十月）

現今の哲學問題

得能文著　第一書房發行

目次

一、現今の哲學問題　二、學問と自由精神　三、科學と哲學との關係　三、自然科學と精神科學　四、自然主義の破綻と文化の威力　五、生活と哲學　附錄一、プレンタノの心理說一班　二、トワルドウスキー「表象の內容と對象」

イマヌエル カント 自然哲學原理

（カント著作集十一）

戸坂潤譯　岩波書店發行

目次

序　解說（本文の成立、緒言及び運動學に就いて、動力學に就いて、力學に就いて、現象學に就いて、本文の歷史的意味、本文の版と文獻）譯　註解　索引

天地人

阪本林助著　眞救院發行

近世教育思想に於ける內在觀の研究

由良哲次著　目黑書店發行

目次

緒論　近世思想の開展と內在觀

一　ルソオ

二　ペスタロッチイ

三　ゲエテの哲學思想とその教育觀

以上の四書は次號以下に機を得て紹介批評すべし。

寄贈雜誌新聞

昭和三年八月、九月、十月

哲學雜誌	昭和三年九月號	四九九號
學苑	同九月號	二五號
理想	同十月號	二ノ三號
哲學青年	同十月號	一ノ十二號
觀想	同九月號	五二號
眞宗研究	同九月號	一五號
基督教研究	同十月號	五—一號
東亞の光	同七八月合併號	二三ノ七・八號
丁酉倫理會講演集	同十月號	三一二號
社會學徒	同十月號	二ノ一〇號
生理學研究	同十月號	五ノ一〇號
全人	同十月號	七二號
教育心理研究	同十月號	三ノ一〇號
靜岡縣教育	同九月號、十月號	三七七號、三七八號
奈良縣教育	同九月號、十月號	一八六號、一八七號
信濃教育	同十月號	五〇四號
願慧	同十月號	八二號
學校教育	同十月號	一八四號
帝國大學新聞	昭和三年九月十七日、十月八日、十月十五日	二十四日、十月一日、